

# Two Early Plays of Sean O'Casey

鳴 沢 寡 愆

## I

北太西洋の波浪が絶えずその岸辺を噛む荒涼たる島国 **Ireland** は昔から屢々内乱外寇に災いされた国であり、それに打ちひしがれた国民は政治的にも文化的にも安定状態を享受すること甚た乏しい其意味では不幸な歴史を持っている。だからその民族生活たるや外面的にも内面的にも平坦な軌道を迎えることが許されなかった。更にまた国土の貧弱さもさることながら、海を隔てた強国 **England** から押し寄せる圧力が加わり、国民の経済生活は全く恵まれることもなく、一部の少数者を除き殆どどん底生活に沈まざるを得ないというのが実情であった。

こうした民族的苦難は屢々国民を駆り立てて或は政治革命に走らせ、或は圧迫者たる **England** に対する反抗運動に没頭させる結果となり、これ等両者の **struggle** は **Ireland** にとりても **England** にとりても全く不幸な宿運であった。

かく苦難の歴史を辿って来た **Ireland** がかの第一次世界大戦に直面するに至るや、この動乱を頂点として両国の関係は遂に破局に導かれてしまい、**Ireland** 全島は、北辺の一部 **Northern Ireland** を英領としてたち切ったまま、大部分は敢然として英国と袂を分ってしまった。その後迂余曲折を経て1937年に至り遂に完全な独立を勝ち得国名も **Republic of Ireland** (又は **Eire**) と改め今日に至っている。

此アイルランド共和国誕生までの径路を念頭に置きながら、一方で近代

**Ireland** 文学の方に眼を向けてみるとこれはまた真に瞳目すべき活動を見せていることは周知の通りである。近代英文学全体の上から見ても **brilliant** な作家作品が輩出し、それ等はみな **Celt** 民族の精神と伝統を根幹としてこれに近代世界文学の思潮を摂取し、英本国の文学とは異質な要素を豊富に湛えた民族文学建立にいそしむのであった。文芸評論家の中で、例えば **Ernest Boyd**<sup>1)</sup> の如きは、この運動を名づけて **Ireland's Literary Renaissance** などと大げさな呼び方をしているけれど質量共にこの名称にふさわしいものであることは争われない事実である。それは神秘憂鬱を愛し而も素朴で清新な **humour** を好む民族性情から生み出された成果であり、**Ireland** 的なるものを世界人に認識させる貴重な舞台となったのである。

吾々がそうした文学界から取り上げようとする劇作家 **Sean O'Casey** という人は、先きに述べた **Ireland** と **England** との葛藤の最中、そして独立寸前の首都 **Dublin** を中心に流血の惨事を繰り返した **Irish people** の生みな生活体験を綴った劇作家として、広く世界文学の上でも注目される一人であると思う。初めに彼の伝記の概略を述べることにする。

**Sean O'Casey** [ʃɔ:n oukási] (1884—)<sup>2)</sup> は **Ireland** の首都 **Dublin** のとある **tenements** で生れた。父は彼の三才の時没し従って主として母の手で養育された。極貧の中に成長して行った彼は、毎日の食にすら事を欠き、餓死に類するばかりの経験も持っていた。それで新聞配達、鉄道工夫、道路工夫と云った労働によって僅かに露命をつなぐ有様であったという。それ故正式な学校教育をうける余裕がある筈はなく、独学と読書によって性来の文学への渴望を癒していた。中でも沙翁を愛読し劇を好んでいたので行く行くは劇壇人として進まんとする野心を心ひそかに抱いていたことが想像される。しかしその予想通りに劇壇へ **debut** したのは比較的遅く、1923年4月12

1) cf. **Ernest Boyd** : **Ireland's Literary Renaissance**  
 ——— : **Contemporary Drama of Ireland.**

2) **Dr. David Krause** によると **Irish Register Office** の記録では彼の出生は1880年であるという。

日、彼の第一作“*The Shadow of a Gunman*”が Dublin の新劇運動の拠点 Abbey Theatre で上演された際であった。その時彼はすでに四十才に垂んとしていた。爾来劇作家としての名声は次第に高まるばかり。1926年彼は Hawthornden Prize を授けられ、英国の批評壇によって彼の劇界における地位は殆ど確定的となった。その時以後の彼の主な作品を列挙してみる。年代は上演の年である。

*The Shadow of a Gunman.* (1923)

*Juno and the Paycock.* (1924)

*The Plough and the Stars* (1926)

*The Silver Tassie* (1928)

*Within the Gates* (1934)

*Cock-a-Doodle-Dandy* (1949)<sup>1)</sup>

O'Casey は 1930年頃 Abbey 座の一女優と結婚すると共に主として倫敦に住居を定めた。或人はこれを彼の *voluntary exile* と呼び、祖国 Ireland からの *exile* であると共に、彼の作品が商業劇場からも永い間 *exile* される結果となった。因みに最後の作は1949年出版されアメリカの Dallas や Boston などで上演されたようだ。それについて或新聞の劇評の中に見出された次の *passage* を紹介しておく。

“*Cock-a-Doodle-Dandy*” is an old brew of realism and fantasy, low comedy and supernaturalism, burlesque and preaching—the whole thing warmed by Mr. O'Casey's love of mankind.

## II

吾々はいま上記の作品群の中から先ず“*Juno and Paycock*”をとってこれを鑑賞してみよう。

時代は Ireland 革命前後の騒然たる1922年 Dublin の市中で Boyle 一家

1) Collected edition は次の通り, Collected Plays of Sean O'Casey, 4 Vols. London. Macmillan & Co. 1958.

が借りている二間続きの粗末な棟割長屋 (tenement house)。先ずその家族の面々を紹介してみると、

亭主の **Jack Boyle** は性来仕事が大嫌いで、朝から晩まで街を遊び歩き、そしてこれも同じ長屋の住人 **Joxer** と仇名されていて同様に吞んでくれの怠け男と一所に酒場へ入りっぴたっている爺さんである。彼は船乗りでもなくせに船員帽を離さないので長屋の人達から **Captain** などとからかい半分に呼ばれている。これは **Boyle** のお神さんの説明によると、

Everybody callin' you "Captain", an' you only wanst on the wather, in an oul' collier from here to Liverpool, when anybody, to listen or look at you, ud take you for a second Christo For Columbus!<sup>1)</sup>

だという。

それなら亭主にずけずけと毒づいている女房はというと、彼女は **Juno** という女神の呼び名を持っている。**Roma** 神話では **Juno** は月の女神結婚の女神となっているが、彼女がどうしてこの美しい仇名を貰っているのかは明らかではないが、作者の下書きの中で

She is forty-five years of age, and twenty years ago she must have been a pretty woman; but her face has now assumed that look which ultimately settles down upon the faces of the women of the working-class; a look of listless monotony and harassed anxiety, blending with an expression of mechanical resistance. Were circumstances favourable, she would probably be a handsome, active and clever woman. (p. 5)

と述べている所から察すると、顔だちはよいこの嬢桜を賞めるともなく揶揄

1) Sean O'Casey : Two Plays. Containing "Juno and Paycock", and "The Shadow of a Gunman", (Macmillan & Co. 1926). P. 18. 本文中の Ireland 式発音を書き換えると次のようになる。Everybody calling you "Captain", and you only once on the water, in an old collier from here to Liverpool, when anybody, to listen or look at you, would take you for a second Christopher Columbus.!

するともなく、口さがない長屋の人達の間で自然に生れて来た呼び名らしい。

序ながら本劇の題名にあたる **Paycock** (勿論正しくば **peacock**) は、これも **Mrs. Boyle** が自分の夫を批評している文句の中に “**Struttin’ about the town like a paycock with Joxer, I suppose**” とある所から来ていると思われるが、更にまた何故老ぼれた亭主を **like a paycock** などと柄にもない形容を持ち出したのかと詮議してみると、これは神話の中の **Juno** は大体孔雀を好んでいたと伝えられている所からでもあろうと推量される。

次に長女の **Mary** は、母親の顔立ちをうけたものかこのような裏長屋には珍らしい美貌で而も文学を好み新しい思想の持ち主である。ここでも作者の説明を借りてみよう。

She is a well-made and good-looking girl of twenty-two. Two forces are working in her mind—one, through the circumstances of her life, pulling her back; the other, through the influence of books she has read, pushing her forward. The opposing forces are apparent in her speech and her manners, both of which are degraded by her environment, and improved by her acquaintance—slight though it be—with literature (p. 4)

組合運動にも加わり進んで革命騒ぎにも一とかどの理解と同情とを抱いているこの娘も、鏡に向って髪形を直したり **ribbon** を結んだりする時にはさすがに年若い女の心裡に返ってしよう。その母親と交わす会話をきいてみよう。

**MRS. BOYLE.** Ah, wear whatever ribbon you like, girl, only don’t be botherin’ me. I don’t know what a girl on strike wants to be wearin’ a ribbon round her head for or silk stockings on her legs either; its wearin’ them things that make the employers think they’re givin’ yous too much money.

**MARY.** The hour is past now when we’ll ask the employers’ permission to wear what we like.

**MRS. BOYLE.** I don’t know why you wanted to walk out for

Jennie Claffey; up to this you never had a good word for her.

MARY. What's the use of belongin' to a Trades Union if you won't stand up for your principles? Why did they sack her? It was a clear case of victimization. We couldn't let her walk the streets, could we?

MRS. BOYLE. No, of course yous couldn't—yous wanted to keep her company. Wan victim wasn't enough. When the employers sacrifice wan victim, the Trades Unions go wan bettther be sacrificin' a hundred.

MARY. It doesn't matther what you say, ma—a principle's a principle. (pp. 7, 8.)

次は Mary の弟 Johnny もまた1922年の革命騒ぎに参加したため、「復活祭週間に腰の辺にうけた弾丸が十分応えたのだが、O'Connell 通りの戦闘で片腕をうち砕いたあの爆弾ですっかりやられてしまって」(p. 9) 今では不具の身を bed に籠り勝ちで青年の客気のやり場がなく家族の人達に当り散らしている。

さて上記の家族が屯している室へ青年の Jerry Devine があたふた這入って来て、Boyle に向い仕事にありつけるから Mangan 親方の許へ顔を出すようにと、これは Father Farrell からの伝言だと告げる。所が Boyle は俄かに脚痛の発作をよそおい素直に承知しようとしな。又 Mary に恋慕している Devine は外出姿の彼女に馴々しく言い寄り、組合の幹事に立候補した自分の当選疑いなしとて結婚を迫ったが、すでに熱のさめた Mary は劔もほろほろに家を飛び出し、Jerry はこれを追う。父親は朝食の sausage を頬張りながら唄い出す。

When the robins nest agen,  
 And the flowers are in bloom,  
 When the Springtime's sunny smile seems to banish all sorrow  
 an' gloom;  
 Then me bonny blue-ey'd lad, if me heart be true till then——

He's promised he'll come back to me,  
When the robins nest agen! (p. 26)

Mrs. Boyle をおそれておすおす這入って来た Joxer を相手に茶を呑んでいる Boyle は自分が仕事に行くようになった話や Father Farrell の噂をしているうちに、話は坊さんや宗教の攻撃に移って行った。

BOYLE. If they do anything for you, they'd want you to be livin' in the Chapel. . . . I'm goin' to tell you somethin', Joxer, that I wouldn't tell to anybody else—the clergy always had too much power over the people in this unfortunate country,

JOXER. You could sing that if you had an air to it!

BOYLE (*becoming enthusiastic*). Didn't they prevent the people in "47"<sup>1)</sup> from seizin' the corn, an' they starvin'; didn't they down Parnell; didn't they say that hell wasn't hot enough nor eternity long enough to punish the Fenians?<sup>2)</sup> We don't forget, we don't forget them things, Joxer. If they 've taken evrything else from us, Joxer, they've left us our memory.

BOYLE. Father Farrell's beginnin' to take a great interest in Captain Boyle; because of what Johnny did for his country, says he to me wan day. It's a curious way to reward Johnny be makin' his poor oul' father work. But, that's what the clergy want, Joxer —work, work, work for me an' you; havin' 'us mulin' from mornin' till night, so that they may be in betther fettle when they come hoppin' round for their dues! Job! Well, let him give his job to wan of his hymn-singin', prayer-spoutin', craw-thumpin'<sup>3)</sup> Confraternity men! (pp. 31, 32.)

1) '47. —1847年の問題のこと。Charles Steward Parnell (1846—1891) の Ireland のための政治活動と彼の最後の没落に際して Catholic Church のとった行動のこと。

2) *Fenians*—Men of a league so called, among Irish in U. S. for overthrowing Eenglish rule in Ireland.

3) *craw-thumpin'*—cf. *craw-thumper*—one who beats his breast (at confession); applied derisively to Roman Catholic devotees; so *craw-thump* (v.) (O.E.D.)

このように宗教 (Christianity) や僧侶に対する根強い反感は国民の胸中に込み込んでいるのであり、1847年当時の Catholic Church のとった行動はまさにこの科白の通り歴史上の事実なのである。但しこの部分は第二幕に至って Boyle が手の平を返すように宗教と僧侶に対する渴仰を表明している個所と対照してみるのは極めて興味深いことである。上に引用した Boyle の文句が第二幕でも屢々そのまま繰り返されてはいるが、それは何れも仕立屋 Nugent の言葉となって居り、Boyle が口を極めてそれを攻撃するという仕組になっている。劇構成の技巧として効果的である。

さて話は元へ帰る。Boyle と Joxer とがおしゃべりをしている所へ Mr. Boyle が Charlie Bentham という青年教師を伴って帰宅、何かしら大はしゃぎである。その訳は最近亡くなった親戚の Mr. Ellison の遺言状により遺産の半分約二千磅が Boyle に贈与されるという知らせを持って来たからである。一家中の皆が興奮し、四人が四人それぞれで達せられる理想を夢に描いている。〔第一幕〕

同じ舞台面である。家具調度類は幾分豊富になっているが総じて下品なものが多い。今や成金になった Boyle は意気昂然と大言壮語している。反対に金の出来た彼と絶交すると断言して Joxer が帰り、Boyle のお紳さんは蓄音機を買って帰る。夫婦と Johnny との間に勝手な意見を戦わせている所へやって来た Bentham は下へも置かれぬ歓待をうけ紳士扱をされる。所が一同の話題が変に外れて固苦しいものに流れてゆき、Bentham のために着飾って Mary がやって来てても変りなく theosophy だとか ghost とかその他一般宗教の問題などにつき素朴な議論が続く。

Scientists are beginning to think that what we call ghosts are sometimes seen by persons of a certain nature. They say that sensational actions, such as the killing of a person, demands great energy, and that that energy lingers in the place where the action occurred. People may live in the place and see nothing, when some one may come along whose personality has some peculiar connection with the energy of the place, and, in a flash, the person

sees the whole affair. (p. 56)

JOHNNY. What sort o' talk is this to be goin' on with? Is there nothin' better to be talkin' about but the killin' o' people? My God, isn't it bad enough for these things to happen without talking about them. (p. 57)

Johnny は一旦急いで左手の室へはいったが間もなく再び飛び出して来た。唇はびくびく引きつり脚は震えている。いつか革命騒ぎで倒れた Robbie Tancred の血だらけになって跪いている姿が幻覚のように今隣室の明りに照らされているのが彼の目にはいったのだった。

そこへ這入って来たのが同じ長屋の住人 Mrs. Madigan といういかにも楽天家肌の中年夫人。思いがけない Boyle の幸運、それと Bentham と Mary との結婚の見通しという風に凡てが明るい空気に包まれ、ここに陽気な一場面が展開される。やがて酒も出されたので席は愈が上にも氣勢が上り歌もはずんで来た。

If I were a blackbird I'd whistle and sing;  
I'd follow the ship that my true love was in;  
An' on the top riggin', I'd there build me nest,  
An' at night I would sleep on me Willie's white breast! (p. 65)

年は争われない囁れ声になったと嘆き昔は “like a nightingale at matin tme” と賞められたこともあったと懐かしんでいる。お次は Boyle の所望で Joxer.

She is far from the lan' where her young hero sleeps,  
An' lovers around her are sighing  
An' lovers around her are sighin' . . . sighin' . . . sighin'

その途端に同じ長屋の Mrs. Tancred の息子の遺骸を教会へ運ぶために病院へ出掛けるといふ人々の足音が聞こえて来る。その息子は革命騒ぎの際伏勢の隊長だったが鉄砲の玉で蜂の巣のように撃たれ、淋しい田舎道に一晩中のびて倒れていたのであった。

Ah, what's the pains I suffered bringing' him into the world to carry him to his cradle, to the pains I'm sufferin' now, carryin' him out o' the world to bring him to the grave! (pp. 68, 69)

と悲歎に暮れている Mrs. Tancred に対し皆が同情を借しまない。中でも Juno は同情の余り Ireland の現状を呪咀しつづける。間もなく Tancred の葬式が讃美歌と共に通り過ぎる。一人の若者が Johnny を見つけ八時に Nelson 像の所へ来るように、そして大隊の参謀会議に出席するようにと命令を伝えて去る。〔第二幕〕

Boyle 一家に破滅の日が来た。教員の Bentham は Mary に妊娠させたまま England へ立去り其の住所すらも秘して二箇月間も一通の便りすらない。又 Mrs. Boyle は娘を伴って医者へ出掛けてゆき凡てが落ち目である。又先きに Bentham が持参した遺言状には The rest of my property to be divided between my first and second cousins. とだけ書いてあり John Boyle とも Michel Finnegan とも明記してないから、何人でも cousins でございと名乗ることが出来る訳である。結局贖の遺言状であったことが曝露されたのだ。

この噂が隅隅まで広まってしまう今日も仕立屋の Nugent が洋服代の未払金の催促に押しかけ来、いきなり Boyle の一張羅を奪って立ち去る。更に Mrs. Madigan は先きに毛布と家具を質入れして貸した三磅を返せと強硬に申入れ、現金が手許にないと云うと、それならこの蓄音機を質に入れて金を作ると引きさらって行く。

そこへ帰宅した Juno は只ならぬ様子をしている。Mary が妊娠していることを医者に告げられたと語り、妹の家へ残して来た娘が帰宅しても叱らないでほしいと夫に頼んでいる。Boyle は何もかも糞の種となり毒舌を弄して Bentham を罵ると共に Juno にも Mary にもハツ当りに腹をたてている。Johnny も上記の不幸を知ると地団駄を踏むばかりに悔しがり益々憂鬱になり、母親とも口喧嘩している。

JOHNNY (*throwing himself on the bed*). I've a nice sister, an' a nice father, there's no bettin' on it. I wish to God a bullet or a bomb had whipped me ou' o' this long ago! Not one o' yours, have any thought for me!

MRS. Boyle (*with passionate remonstrance*). If you don't whisht, Jonny, you'll drive me mad. Who has kep th' home together for the past few years—only me. An' who'll have to bear th' biggest part o' this trouble but me—but whinin' an' whingin' isn't goin' to do any good.

JOHNNY. You're to blame yourself for a gradle of it—givin' him his own way in everything, an' never assin' to check him, no matter what he done. Why didn't you look affter th' money? Why... (pp. 99, 100)

或家具会社の男二人が現われ先日一家が買って来た家具類を取戻すという。この時 Mary が家に帰って来、その後から Devine が追っかけて来て Mary に慣々しく話しかける。男に裏切られどん底に堕ちてみじめな気持の Mary が、以前に変らぬ優しい言葉をかけ愛を求めに来る Devine の心情にほだされてゆく経路、そして一方妊娠を知ると手の平を返すように逃げ出そうとする Jerry のいわゆる “humanity”。これ等は実に息もつかせぬ緊迫した簡潔な科白を通して表現されている。恐らく全篇中最も exciting な dialogue の一つであろう。

続いて拳銃を携えた二人の革命党員 Irregulars が足早に駆けこんで来る。その一人は道具屋に両手をあげさせ、今一人は Johnny に詰め寄って厭がる彼を無理無体に引き摺ってゆく。「Tancred の命を奪った軍隊に彼を売った貴様」とか「珠数を持っているか」などと気味悪い言葉を吐きかけ、何かしら不吉な予感で Johnny はわめきながら連行されてゆく。

ここで暗幕の舞台が上ると Mary と Mrs. Boyle とが炉辺に腰かけている。そこへ Madigan のお神さんが来て、「死体が見付かったと巡査が言っている」と云う。Mrs. Boyle にとってそれが Johnny であることがよく分る。彼女は今こそかの Tancred の婆さんが息子を亡くした時の苦みを自分も身

を以て味おう時が来たと悲歎の涙にくれる。そこへぐてんぐてんに酔払った **Boyle** と **Joxer** とが転がるように帰って来て、訳の分らぬくだを捲き合う。  
〔第三幕〕

### III

吾々はこの劇において先ず考えねばならぬことは、この作の芸術的価値とか劇としての優劣とかということとは別に、いかにもそれが **Ireland** 的作品であるという点である。即ち本文の冒頭で述べた通り昔から内外よりする動乱の痛手を身一つに受けとめていた民族と国家との健気な抵抗、これを全篇の底流として味読しなくてはこの劇の有する真の使命を憶測することは不可能である。

更にこの問題を絞って **Ireland** 的という意味をこの劇の登場人物と **situation** とに当てはめてみるならば、一方において着しく朗らかな **optimistic** な人物の一群即ち **Boyle** と **Joxer** をその代表的なものとしてみて、彼等の言動に **comical** な **humorous** な道化的と言ってもよい面が著しいことは言をまたない。そのみならず、この **tenement house** の住民 **Juno** にしろ **Mrs. Madigan** にしろ、これと同種の人物は幾らもいるのである。だから一篇の劇に明るい場面が幾度となく創り出されている。所がこれと同時に一方でこの陽気な空気とは全然相反する **melancholic** な **tragic** な人物と **situation** とが屢々点出されている。例えば長男 **Johnny** の過去における経験と及び彼の性格そのものとは正に然り、その外 **Mary** の恋愛、**Mrs. Tancred** の息子を奪われた後の悲哀、これ等が前記の道化的気分の真中へ一道の冷気の如く込み通ってゆくのを感ずる。

この **comic** であるが同時に **tragic** な、互に相矛盾した二つの気質、これはそのまま **Celt** 民族の本性に深く根ざしている **humour** と、更に又長い間の迫害という外的原因によって後天的に **acquire** した所の憂鬱と悲哀との二つであり、それ等が互いに相交錯してこれが今日の **Ireland** 民族の現実の姿であり **Ireland** 文学の底流である。而もこうした現実の生まな事象を単に目

で見、耳で聞いたばかりでなく、自らその渦中に飛び込んで体験した O'Casey の描く文学がこの “Juno and Paycock” なのである。彼はこの劇に明らかに **tragedy** と銘を打っているが上述の見方からすると正しくば **tragi-comedy** と呼ぶのが或は作品の実態に沿うものかとも思われる。そしてこの作の翌々年に出た “The Plough and the Stars” ではこの悲劇の様相を一層深く追求し、名実共に優れた一篇の **tragedy** を生み出したのであった。

## IV

その次の作品 “The Plough and the Stars”<sup>1)</sup> は1926年に Abbey Theatre で上演された。

時は第一次世界戦争の最中1915年、1916年 Dublin の煉瓦工で愛蘭島市民軍、The Irish Citiyen Army の司令官 Jack Clitheroe 家の居間。そこにいる三人の男女の一人、禿頭の大工 Fluther Good は door の鍵穴を修繕している。今一人 Peter Flynn はこの家の年若い主婦 Nora の 叔父で今 fire place の前で shirts を乾かしている。第三は家の表から衣粧箱の包みを抱えては行って来た洗濯女の Mrs. Gogan。その包みの中には今日の Nora の誕生日を祝った夫 Clitheroe からの贈物の帽子がはいっている。おしゃべりの最中に主人の従弟 Willie 青年が登場。彼は左翼思想唯物観の持主で今のアイルランド人の愛国主義的行動に極度に反対している。予定の市民大会に対してまるで唾でも吐きかけんばかりの侮辱の言葉を投げつけるのを、元から苦々しく思っている Peter は “little malignant oul' bastard you lemon-whiskered oul' swine” (p. 19) と罵り青年は室を逃げ出す。そこへ Nora が帰って来る。22才の美しい女で新調の衣裳をつけ fox-fur など巻いている。次いで街の果物売の婆さん Bessie が顔を出し Nora の美しい粧いを見て日頃の貧乏人のひがみから毒々しい罵言雑言を吐きかけ、果ては室内へ乱入し Nora を捉らえ振り廻している。夫 Jack がはいって来る。彼の表情は a face

1) Plough and the Stars は the flag of the Irish Citizen Army であり、そのまま本劇の表題となった。

in which is the desire for authority, without the power to attain it. と説明されている。この一種の *ambition* に燃えている25才の青年のこうした性質が悲劇の大きな原因となるのである。

*Tea* の時刻が来る。お茶を呑みながら *Jack* は *Nora* をも大会へ誘い出そうとするが何故か彼女はこれを拒絶する。*Jack* は同輩の *Brennan* が *Captain* に昇任したその偉大さを見せびらかすには絶好の機会だ。“*The Plough and the Stars*”の旗をかかげ *Citizen Army* の先頭に立つ彼の得意さはさぞ壮観だろうと針を含んだ皮肉を浴びせると共に “*He was sweet on you, once, Nora?*” とからかうように曰う。

*Peter* は相変らず癩癩玉を破裂させ *Willie* に茶碗を投げつけようとして僅かに *Jack* に止められる。“*Looking' like th' illegitimate son of an illegitimate child of a corporal in th' Mexican army!*” というこの罵言は奇想天外とも言うべきもので、恐らく *Irish humour* に満ちた詞だとも考えられる。*Peter* は *Nora* に佩劔を吊って貰い鳥の羽のついた帽子をかぶせて貰いぶりぶりして室を出てゆく。後に残った年若い二人は誕生祝いに届いた新しい帽子をかぶり手を取り合って楽しく愛の唄をうたい合う。そこへ思いがけなく *Captain Brennan* が来訪する。彼は *General Connolly* からの公文書を持参したがその文面は次のようになっていた。

Commandant Clitheroe is to take command of the eighth battalion of the I. C. A. which will assemble to proceed to the meeting at nine o'clock. He is to see that all units are provided with full equipment: two day's rations and fifty rounds of ammunition. At two o'clock A.M. the army will leave Liberty Hall for a reconnaissance attack on Dublin Castle.—Com.-Gen. Connolly.

*Jack* は自分が *Commandant* に任命された覚えはないが、と不審を抱く。*Capt Brennan* は二週間前自分が *General* の使者として辞令を携えて来て *Mrs. Clitheroe* に手渡したと言う。*Jack* は *Nora* に向いきびしい調子で問い詰めると言い淀む妻も遂に自白してしもう。

NORA (*flaming up*). I burned it, I burned it ! That's what I did with it! Is General Connolly an' th' Citizen Army goin' to be your only care? Is your home goin' to be only a place to rest in? Am I goin' to be only somethin' to provide merry-makin' at night for you? Your vanity 'll be th' ruin of you and me yet. . . . That's what's movin' you: because they've made an officer of you, you'll make a glorious cause of what you're doin', while your little red-lipp'd Nora can go on sittin' here, makin' a companion of th' loneliness of th' night!

CLITHEROE (*fiercely*). You burned it, did you? (*He grips her arm*) Well, me good lady——

NORA. Let go——you're hurting me!

CLITHEROE. You deserve to be hurt. . . . Any letter that comes to me for th' future, take care that I get it. . . . D'ye hear——take care that I get it!

Jack は仕度を整え Brennan と出掛けでゆくと後で Nora は新調の帽子を自棄に投げ出す。〔第一幕〕

独立運動の meeting が行われている街角の居酒屋。Barman と酒場女の Rosie とがその会合の噂をしていると、窓の外から演説の声が聞こえて来る。Peter と Fluther とが昂奮して現われる。一杯呑みながら頻りに愛国精神の昂揚をちかい、愛蘭島の奴隷状態から脱することを主張している。彼等が speaker の声に誘われて再び店をとび出してゆくと入れ違いに Covey が駆けこんで来る。客が少なく退屈していた Rosie は青年に話しかけ麦酒を呑まして貰う。やがて shawl をかなぐり捨て胸もあらわに出したまま青年にもたれかかるうとすると、青年はこれを嫌って店を逃げ出す。

Peter と Fluther とが、赤坊を抱いた Mrs. Gogan を伴って再びやって来て大声で話し始めると、更に Covey が Bessie と連れだって、彼等と反対の側に陣取る。Peter の連中は愛国主義者でこの日の大会の賛成者、そして Covey 等はその反対論者、proletariat 主義者、且つ新しい経済論者である。対立したこの両者互に相手方を攻撃し合い Mrs. Gogan と Bessie との

烈しい口論となり果ては掴み合いにまで発展する。Barman が伸へはいい二人を店から押し出す、いつの間にか女達から赤坊を手渡されていた Peter はその始末に困りそれを抱いたままこれもどこかへ消えてしまう。

間もなく “The Plough and the Stars” の旗を持った Captain Brennan 緑白橙の三色旗を持った Lieut. Langon 及び Clitheroe の三人が急ぎ足で登場、何れも興奮して頬を紅潮させている。そして port の盃をあげ、今や革命の機到れりとなし、互に家を忘れ肉身を捨てることを誓い合いつつ立ち去る。又 Rosie も Fluther ともつれ合い “I once had a lover, a tailor . . .” の唄声が次第に遠ざかる。〔第二幕〕

Clitheroe 家の表。Mrs. Gogan が肺病の娘 Molliser を椅子にかけさせいたわっている所へ Peter と Covey とが昂奮して入場。先きに夫の安居を気遣って飛び出した Nora と、これを追っかけて行った Fluther との二人のこと、更に市街戦が到る処に起って街は大混乱に陥り死傷者も増加した恐怖の光景を語り合っていると、Nora が蒼い顔をして髪を振り乱し着物を埃まみれにし、Fluther に抱えられて来る。消息の分らない夫の Jack が今にも鉄砲に撃ち殺されると狂気のように叫び立てる。

Th' agony I'm in since he left me has thrust away every rough thing he done, an' every unkind word he spoke; only th' blossoms that grew out of our lives are before me now; shakin' their colours before me face, an' breathin' their sweet scent on every thought springin' upin me mind, till, sometimes, Mrs. Gogan, sometimes I think I'm goin' mad! (p. 84)

騒然たる市街戦のさ中で人々が狼狽して右往左往するうちに Capt. Brennan が傷ついた Lieut. Langon を抱えるようにして帰って来た。その後ろには Clitheroe が手に銃を擬して従っている。悩み抜いていた Nora は夫の姿を認めるや狂気のように家から飛び出し夫に武者振りついて喜ぶ。こうした緊迫状態にありながらもさすがに愛情にほだされた Jack は妻と kiss を交わしている。二人の別れの刻が迫る。

CAPT. BRENNAN (*to CLITHEROE*). Go on, Jack, bid her good-bye with another kiss, an' be done with it! D'ye want Langon to die in me arms while you're dallyin' with your Nora?

CLITHEROE (*to NORA*). I must go, I must go, Nora. I'm sorry we met at all. . . . It couldn't be helped—all other ways were blocked be th' British. . . . Let me go, can't you, Nora? D'ye want me to be unthru to me comrades?

NORA. No, I won't let yo go. . . . I want you to be thru to me, Jack. . . . I'm your dearest comrade; I'm your thruet comrade. . . . They only want th' comfort of havin' you in th' same danger as themselves. . . . Oh, Jack, I can't let you go!

CLITHEROE. You must, Nora, you must.

NORA. All last night at th' barricades I sought you, Jack. . . . I didn't think of th' danger—I could only think of you. . . . I asked for you everywhere. . . . Some o' them laughed. . . . I was pushed away, but I shoved back. . . . Some o' them even struck me. . . . an' I screamed an' screamed your name! (p. 100)

あくまでも引留めようとする Nora, 軍務に縛られ妻の軽卒をたしなめている Clitheroe, 二人のやりとりは何時果てるともない。血のにじむような声をあげて必死に引き留める Nora の手を振り切って Jack は他の二人と出てゆく。往來で倒れ臥した Nora は Bessie に援けられる。そこへ酔払った Fluther が街で掠めとった上着婦人帽などを身につけ大きなウィスキー瓶を手に掲げ大声で怒鳴ってやって来る。〔第三幕〕

舞台は Bessie Burgess の薄暗い屋根裏の居間。死んだ娘の Mollser の遺骸を納めた櫛の木の柩が据えられ蠟燭が二本灯されてある。その左手の室では子供を死産し行方不明の夫を慕って少しく気が変になった Nora の唸き声が聞こえている。そこへ市民服に着換えた Capt Brennan がやって来た。其顔はやつれ着衣の所々に泥がついている。Mrs. Clitheroe に夫の臨終の模様と遺言とを伝えるために訪れたのである。

CAPT. BRENNAN (*sinking stiffly and painfully on to a chair*)

In th' Imperial Hotel; we fought till th' place was in flames. He was shot through th' arm, an' then through th' lung... I could do nothing for him—only watch his breath comin' an' goin' in quick, jerky gasps, an' a tiny sthream o' blood thricklin' out of his mouth, down over his lower lip... I said a prayer for th' dyin', an' twined his Rosary beads around his fingers... Then I had to leave him to save meself... (*He shows some holes in his coat*) Look at th' way a machine-gun tore at me coat, as I belted out o' th' buildin' an' darted across th' sthreet for shelter... An' then, I seen The Plough an' th' Stars fallin' like a shot as th' roof crashed in, an' where I'd left poor Jack was nothin' but a leppin' spout o' flame!...

I took me chance as well as him... He took it like a man. His last whisper was to "Tell Nora to be brave; that I'm ready to meet my God, an' that I'm proud to die for Ireland." An' when our General heard it he said that "Commandant Clitheroe's end was a gleam of glory." Mrs. Clitheroe's grief will be a joy when she realises that she has had a hero for a husband. (pp. 113—114)

白い寝巻を着た **Nora** が幽霊のように現われる。幾日も手入れをしない髪の毛は肩に乱れかかり、青白い顔色は頬に一点赤味がさしているため一層目立って見える。目は狂者の色をおび、そして幻想に捉らわれたように脈絡もない独り言のうちには **Jack** に対する無限な追慕がにじみ出ている。**Bessie** がなだめて寝つかせようとするとう度は赤坊を呼び夫の名を繰り返す哀れさに **Bessie** は子供をなだめすかすように歌をうたって漸く室へ連れ去を。

**Mrs. Gogan** は自分の縁者が唯一人面倒を見てもくれないのに **Fluther** だけが命の危険を冒してまで葬式万端の準備を終ってくれたことに涙を流して感謝している。かくて棺が男達に担がれ一同が立ち去って静けさの戻った室に寝巻のままの **Nora** が放心したように這入って来る。何を思ったか彼女は戸棚の中から汚れた **table-cloth** とお茶の道具を取り出し、今に帰って来ると信じている **Jack** のためにお茶の仕度をし、夫との別れ際に唄った "The

violets were scenting th' woods, Nora” の歌を美しい声でうたう。突然窓外に小銃機関銃の音が入り乱れて物凄くひびくので彼女は急いで窓から顔を出し夫を呼び赤坊を求める。目を覚ました Bessie が駆けつけ Nore を奥の室へ去らしめようと争っているうちに流弾が飛んで来て Bessie が倒れる。そして物狂わしく呼んでいる Nora の側で微かに讚美歌をうたいつつ息が絶えてしまうのであった。

Mrs. Gogan は Bessie の死体に取り縋ると共に Nora を奥へつれ去る。銃声は益々烈しくなり、街では General Post Office 攻防の戦闘が酷である。  
〔幕〕

## V

この劇が1926年 Dublin で上演されると the Republican 達は彼等の運動の動機やその犠牲者に対する侮辱であると抗議して来た。然し侮辱であるにせよないにせよ、劇の内容が上べだけの nationalism への批判であり、曾て J. M. Synge が祖国 Ireland の人々に与えたよりも遙かに苦い薬となったのである。辛辣な humour, 貧民窟に棲む patriots に対する情け容赦もなき仮面の剥脱、これ等を力強く劇中に盛り上げようとした O'Casey の鋭い意欲がまざまざと見えている。即ち第一次世界大戦という人類社会の大動乱を背景とし、その動乱に揺り動かされる Ireland という一小島国存立の苦悶が色々な面からのぞき見られる。そこには思想上左右の対立がいつまでも調和すべくもなく平行線を描いているかと思えば、殖民地肯定の意識の根強い Anglo-Saxon 族と民族独立の意識に燃える Celt 族との宿命的な脊反が描かれている。本来これ等のテーマは廿世紀における何れの民族も個人も、程度の差こそあれ必ず一度は経験せねばならなかった所の、いわゆる the way of all flesh だったのである。だからこの一篇は一民族の直面した tragedy であると同時に、大きな organization をなして棲息する全地球上の人類社会の悲劇に通ずるものであったことを忘れてはなるまい。この意味で本劇は近代の social drama が次第に aufheben されて行った その頂点に立つ所の一傑作

だと見ることが出来るであろう。

この点を作の **heroin** の **Nora** に **spotlight** をあてて更に吟味してみる。**Nora** の場合は夫 **Jack** への愛情が動乱の飛沫をうけて断ち切られた者の悲劇である。即ち人間の運命を律するものは性格そのものだとするかの性格悲劇の場合ではない。**Ibsen** の **Nora** におけるように夫婦間の生活感情の相異から来た破端でもない。彼女を殆ど癡呆に近い精神状態にまで押しつぶした直接の原因は勿論愛する夫の喪失にあるのではあるが、これは決して彼女一人の運命ではなかった。第二第三の **Nora** が陸続と彼女の後ろから従いて来たわけである。だから **Nora** もその一員である所の広大な **human organization** にまで吾々の視点を移して行って始めて彼女の悲劇の正体本質が捉えられるのである。

これは近代劇の **realism** が大きく生長を遂げ、かの沙翁すらもが釣り着けなかった所の社会悲劇を開拓する所まで来たことを物語る。例えば **Hamlet** における **Ophelia** の運命とその悲哀とをとってみる。それは彼女の持ち前の性格とそしてその属している階級の特殊性とに由来して居り、又 **Hamlet** の思想と性格との交渉から結果するものと言うべきもので、或局限された人物の局限された **situation** から生起した現象とみることが出来る。今日より三百余年前の人間と社会とから生れた悲劇と、今日大巾に変革をうけた近代社会から生れた悲劇との間の大きな相違である。若しも劇文学が文学の諸形式のうちでも、特にその属する社会体制の特質と密着してゆくべきものであるとしたら、**O'Casey** のこの時期における作品の偉大さはまさに祖国 **Ireland** の社会体制の中から人間の悲劇を発掘して来たことにあるのではあるまいか。<sup>1)</sup> 〔完〕

---

1) **Sean O'Casey** のまとまった評伝としては次にあげるものが唯一ではあるまいか。**Sean O'Casey, The Man and His Work, by David Krause (Collier Book.)** 1959.